遠山記念館 だより　第54号

美術館の展示室が４月１日　リニューアル オープン いたします

リニューアルのなった展示室。4月の特別展「遠山元一と美術」に向けて、環境の調整中です。どうぞご期待下さい。

昭和45年（1970）から一般公開を始めた遠山記念館は、建築家今井兼次（いまいけんじ）の設計になる美術館を建設して、コレクションの展観をしてきました。

ブロンズ扉の入口を入ってロビーの両側に設けられた小さな展示室（63㎡、70㎡）に、日本美術とオリエント美術から選んだ収蔵品を飾り、母屋の近代和風建築、庭園とともに楽しんでいただく、それが始めのコンセプトでした。

創立者遠山元一はその12年前に、長野県安曇野の碌山美術館（今井兼次設計）設立に協力をして、今井氏との縁が始まり、それ以降、長崎の日本二十六聖人記念館（昭和37年）などキリスト教関係の建築作品をいくつも手掛けてきた今井兼次こそ、記念館展示室の設計に最適者であると考えたのでしょう。

今井兼次75歳、最後の作品となった遠山記念館は、今井作品の集大成といっても過言でないほど、建築のディテールにこだわりの創意が籠められています。キリスト教徒である遠山家からの聴取をもとに、家族の信仰と生き方を建築造形として表現することに、情熱を注ぎました。

「遠山美術館についての私の構想 追加分」（今井自筆レポート）から、“建築へのささやかな精神性の投入の意義”の幾つかをご紹介します。

一、内外階段部のメタル円形浮彫り・不死鳥

スペイン カタロニアの初期ロマネスク壁画より取材　遠山美術館の永遠性を意図させました

四、ブロンズ扉面のシンボル・マーク

遠山家の紋章を中心にした太陽　斜光の中に槲（かしわ）の葉が十字に秘せられています。槲の葉は誠実、勇気、忍耐などの象徴です。遠山美術館の不朽性と繁栄を意味付けております

五、ロビー入口硝子扉のサッシ構想

昇る朝日　ガラス扉を通して雲間からのぼる朝日を念頭に入れてのデザインです

九、天井フレスコ

ロビー内、照明器具を中心にした十字花をかこむ楕円形の大形のもの　御母堂を象徴　四季の花々をかすみの中に淡く点在す

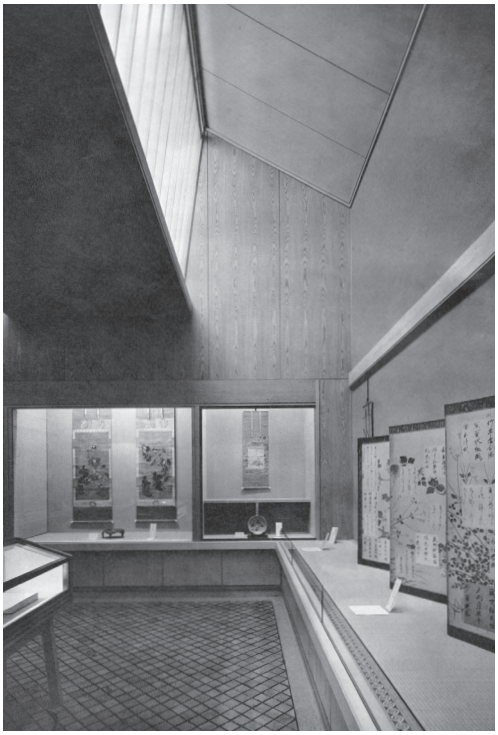
十二、中近東展示室入口額ブチ面左右の浮彫り

中近東のコプト織紋様より取材

これらの意匠については美術館建築の案内をする際には解説をしますが、通常はそれらに説明文はなく、可憐なディテールを自由に見ていただいています。単なる飾りではない意味づけされた装飾がここまで、溶け込むように埋め込まれた美術館建築は、他に例が無いのではないかと思われます。

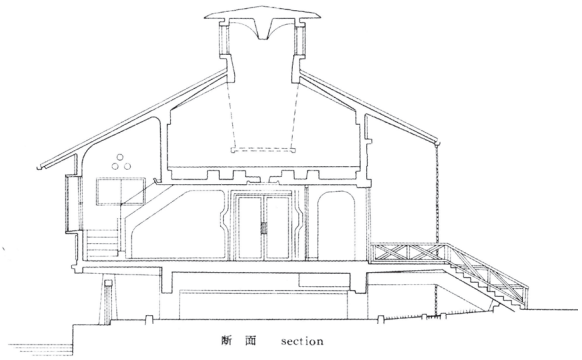
今回の美術館改修工事は、こうした今井兼次独特の意匠を損ねないで、美術品の展示環境や、空調設備、照明設備を最新のスタイルに移し替えることが基本姿勢です。

ところで、腰屋根ガラス窓からの自然光を、展示室内にトップライトの間接光で採り入れる今井設計は、48年前の竣工当時ではそれほど問題ではなかったようです。昭和34年(1959)竣工のル・コルビュジエ設計の国立西洋美術館も同じ採光で設計されていました(後に蛍光灯照明に変更)。



改修前の展示室

美術館立面図



紫外線などの影響を受けやすい書画や染織品を展示することが多い遠山記念館ですので、紫外線をカットできる特殊塗装をして対応してきました。ただし、明るさが変化する外光を調節して、美術品の鑑賞に適切な照度に維持することは至難でした。

改修工事では、展示室内へ外光が入らないように遮光し、展示ケース内の人工光による安定した明かりで作品を照明することにしました。

これまで、当館で展覧会を楽しんでいただいた方は作品鑑賞に集中されて、展示室の天井をゆっくり仰ぎ見る方は少なかったでしょう。両展示室とも壁仕様は違いながら、カテドラルの内部空間を想わせるような吹き抜けの高い天井になっています。

改修後は、落天井うえのガラスを透過する自然光はなくなり、かなり暗くなるため、これまでの雰囲気が味わえなくなるのは残念なかぎりです。

さて、展示ケースは、内部の温湿度を適正値内に維持できる最新のエアタイトケースになります。温度と湿度が外気と同じように変化することは、美術品に影響を与えかねないので、作品の状態を良好に保ち、次世代に伝えていくために、機密性が極めて高く、細かい埃も害虫も寄せ付けないケースを導入いたします。また、先ほどの自然光方式とともに、現代の美術館展示環境としては相応しくなかった露出展示台も、一部を残してなくします。

丈が2m77cmもあるフランドルのタペストリーなどはケース内に収まりきれないため、これまでと同じようにオープンスペースに掛けて御覧いただくことにしました。

美術作品を展示する環境を良好な状態にするのと同時に、作品のもつ美しさを自然に、ゆったりと鑑賞していただくためには、照明計画が重要になります。

従来は紫外線カット蛍光灯によるケース内天井照明だけでしたので、ケース内の照度にむらができて見づらい部分がありました。調光のできる上下からの安定したLED照明に替えることによって、作品をより鮮やかに美しく見られるようにします。

スポット照明具を加えて、光りの当てる角度や光りの色味にも十二分に配慮して、作品それぞれの素材や特性を引き出せるようにしていきたいと考えています。

従来の展示の様子を覚えていらっしゃる方は、その格段の変化に驚かれるかも知れません。

そして、入口のブロンズ扉の内側にガラスの自動扉が付き、展示室とロビーには安定した空調が入り、人にも作品にも快適な室内環境になります。入口横の受付がロビー内に移動して、ショップスペースもできますので、絵葉書や図録、オリジナル手拭いなどの買い物もお楽しみください。

改修工事は、美術館の設計管理施工に実績のある株式会社ムラヤマに発注し、展示ケースは 株式会社岡村制作所が担当しました。既存部分との調和を優先する手間のかかる工事を実施してくれました。

天井フレスコのデザイン、ステンドグラスや階段手摺りのフェニックス飾りなどはそのままのロビー風景。

最後に、今井デザインの美術館入口扉上にあるブロンズ天使像についてご案内します。

金斑入り大理石板の上、八星円座中に留められている天使像（横72cm）です。May26,1969の年紀入り今井兼次自筆のスケッチに基づいて、彫刻家の笹村草家人が制作を担当しました。笹村氏は碌山美術館の創建に尽力し、その際に元一と親交がうまれ、遠山記念館開館時にはその顧問になっていただきました。

自筆スケッチとブロンズ像では、微妙に細部が異なっていて、２人がどのように話し合いながら制作したのか興味がもたれるところです。仰向けで頭をもち上げ、胸に散華の籠を持つ姿は珍しく、ロマネスク彫刻や、今井氏が日本に初めて紹介されたスペイン・バルセロナのサグラダファミリア、その彫刻などにも似た天子像は見つかりません。まさか、似てはいても京都の法界寺阿弥陀堂障壁画の飛天図が原典ではないでしょう。

昨今の結婚式のフラワーシャワーには繋がらなくとも、花の香りで清め、災いを除け、幸せを祈る気持ちを籠めた天使と思われます。

遠山元一が生家の再建を遂げる昭和11年4月の半年前に行った本宅新築感謝会で、ミサの最初に述べられた式辞はこう終えられました。

「・・此家に住む者、之を用ふる者、将又（はたまた）随時訪ひ来るべき許多（あまた）の人々を顧みて、更に多くの福祉を与へ給はん事を、只管謙（ひたすらへりくだ）りて祈るべし」

34年後に新たに加えられた建物である美術館においても、来館者を迎える際の遠山元一の思いは上記のままであったに違いありません。

桜咲くこの４月、リニューアルのなった美術館での特別展「遠山元一と美術」を見にいらした皆様にも、入り口の天使像がいつもと変わらずに、やさしくほほえんでくれることでしょう。

（久保木彰一記）

秋田市立千秋美術館「遠山記念館名品展　至高の日本美術」について

依田 徹

昨秋の9月から11月にかけて、秋田市立千秋美術館において「遠山記念館名品展　至高の日本美術」を開催していただいた。千秋美術館の小松大秀館長は、当館の関口正之館長と、かつて東京国立博物館で同僚だったという縁があり、今回のこの貴重な機会をいただいた。

秋田市は、かつて佐竹氏が統治した久保田藩20万石の城下町である。秋田駅西口には今も久保田城跡が残り、その濠の南側には秋田県立美術館をはじめとする文化施設がならんでいる。その中の一つに複合施設「アトリオン」があり、その二階が千秋美術館の展示室となっている。この「千秋」という名称は、久保田城の雅称に由来する。明治時代に旧久保田藩の漢学者・狩野良知により、秋田の「秋」に長久の意の「千」を冠し、長い繁栄を祈って、城郭一帯が「千秋公園」と名付けられた。東京九段下の佐竹家邸跡は、現在は同家の文庫として公開されており、こちらの名前も「千秋文庫」である。

久保田城御隅櫓

今回、遠山記念館では65点の作品を貸出して、千秋美術館の特別展会場にて展観された。このような大規模な出張展示を、美術館業界では「出開帳」と呼んでいる。本来「開帳」とは寺院が秘仏などを公開する仏教用語で、外に持ち出す場合を特に「出開帳」と呼んだ。江戸時代には、法隆寺などの古社寺が建築改修の資金を得るため、江戸ではこうした出開帳が盛んに行われた。仏像や宝物を陳列する出開帳は、日本における展覧会の原型なのである。当館としては、このような出開帳の開催は、平成7年（1995）に根津美術館において「百華の宴―遠山記念館開館25周年名品展」を行って以来、実に20年ぶりのことである。当館は昨年、美術館改修として半年間の休館をとったため、館蔵の重要文化財6点すべてを出品するという、極めて充実した貸出展示が可能となった。

作品は業者による美術梱包が施され、専用車で秋田に運ばれた。3日間をかけた展示作業では、千秋美術館学芸員の展示作業に参加させていただき、9月23日の開会式を迎える。当日は穂積志秋田市長、小松館長をはじめ、当館からも遠山公一理事長、関口館長が参加してテープカットが行われた。旧藩主・佐竹家に伝来した「佐竹本三十六歌仙絵　頼基像」（重要文化財）が展示されるということもあり、美術に関心のある市議会議員などの来賓が多勢出席された。テープカット後は当館の久保木彰一副館長がギャラリートーク、そして記念講演を行った。

開会式のテープカット

展示構成は最初にプロローグ「遠山記念館の至宝」と題し、「秋野蒔絵手箱」、源頼朝の「書状」、英一蝶「布晒舞図」と、遠山コレクションを代表する重要文化財3点を展示した。周囲のバナー（垂れ幕）には遠山邸の建築写真が載せられ、あたかも遠山記念館そのものが秋田へ出張したかのような演出であった。

会場ゲート正面に展示された「秋野蒔絵手箱」
写真提供 千秋美術館

第一章「邸宅を彩った絵画と茶道具」では、元一が来客をどのようにもてなしたのかという視点から、遠山邸の座敷飾りに用いられたであろう、絵画と茶道具の名品を展示した。

最初の長いウォールケースには、尾形光琳、喜多川歌麿をはじめ、当館所蔵の近世絵画の選りすぐりが一堂にならんだ。

写真提供 千秋美術館

第二章「華やぎの装いと雅の世界」では、平安貴族の優美な世界を連想させる、源氏物語や伊勢物語に題材をとった絵画や工芸、また小袖の名品を展示した。

写真提供 千秋美術館

この展示室奥の壁には、先述した「佐竹本三十六歌仙絵　頼基像」が展示された。鎌倉時代に描かれた三十六歌仙絵の最古本であり、精緻な面貌表現などが見どころとなる。秋田県ゆかりの作品であるものの、2巻組の巻子本から現在は37点に分割され、当館ほか博物館施設や個人に分蔵されている。作品にとってはある種の郷帰りであり、今回の展示の重要な見せ場となった。

「佐竹本三十六歌仙絵　頼基像」

三章「遠山好み・元一の眼」では、元一が好んで蒐集した清水比庵の作品、また元一の母・美以が遠山邸竣工披露の際にぜひにと購入した作品など、遠山元一の人間像を象徴する作品を並べている。

千秋美術館の展示室は、遠山記念館の展示室の約4倍という規模であり、一点一点にゆったりとした空間を持たせる展示が行われた。特に間口の広いウォールケースに展示された安田靫彦（ゆきひこ）の大作屏風「風神雷神」などは、当館館員から見て、常と異なる堂々とした印象を受けた。

写真提供 千秋美術館

展示会場の休憩所では、遠山邸の見どころを案内するビデオを上映していただいた。会期終了後、このビデオを見てはるばる埼玉まで来られたという、秋田からの来館者もいらっしゃった。またミュージアムショップでは当館のグッズを販売していただき、特に大判絵葉書が好評を博したとのことである。

会期は44日間で、5千人に近い人々が来館された。これだけの方々に、遠山記念館と、そのコレクションを紹介していただいたことは感謝に堪えない。千秋美術館の小松館長と、秋田市の文化行政の皆様に、この場をお借りして篤く感謝の意を述べたい。

ミュージアムショップ

2018年 前期 展覧会

遠山記念館リニューアル記念特別展

遠山元一と美術

後援：ＳＭＢＣ日興証券

4月1日(日)～5月13日(日)

昭和45年(1970)、日興證券(現・ＳＭＢＣ日興証券)創業者である遠山元一は、郷里の川島町に私立美術館「遠山記念館」を開館させました。所蔵品は邸宅に飾られた日本や中国の古美術のみならず、アンデスやエジプトの美術、また近代彫刻家の萩原守衛の作品など、多岐にわたります。

この時に元一が建てた美術館もまた、モダニズム建築家・今井兼次の最後の作品になります。本年3月に美術館展示設備の改修を終え、遠山記念館は再出発いたします。美術館のリニューアルを記念した本展では、当館の所蔵する作品を通じて元一の人間像を紹介することを試みます。

展示構成

- 第1章　遠山邸の竣工
- 第2章　前田南斉の調度
- 第3章　アンデス調査団と元一
- 第4章　メソジスト信仰とコプト裂
- 第5章　趣味と家庭
- 第6章　清水比庵へのシンパシー
- 第7章　美術館の建設

英一蝶「布晒舞図」江戸時代　17-18 世紀（展示期間　4/1－4/22）

人物文様綴織コプト裂
4－5 世紀

指物：前田南斉／象嵌：木内省古
彫嵌衝立「松に雉牡丹図」昭和初期

萩原守衛「女」
明治43 年(1910)

【土曜講座】

題「日本美術館史上の遠山記念館」
日時：4月14日(土) 午後1：30～

定員：80名（先着順、事前予約不要）
参加費：300円（別途入館料）
担当：依田 徹（当館学芸課長）

コレクション名品選１
# 黒田清輝「裸婦習作」と近代絵画
5月19日(土)～ 7月1日(日)

昨年6月、黒田清輝（くろだせいき）の油彩画「裸婦習作」の修復が完了しました。アトリエの裸婦を描いたこの習作は、黒田がフランスでラファエル・コランに師事し、木炭画から油彩画へと進むことを許された1888年(明治21)1月以降、一年半前後のうちに描かれたものと考えられています。黒田が洋画家として立つまでの道程を垣間見ることができる貴重な作品ですが、傷みが激しく、画面も不鮮明で鑑賞に支障を来すレベルでした。付着した汚れの除去を主とした今回の修復を経て、本来の暖かみのある明るい色彩がよみがえり、外光派の特徴が鮮明に現れた画面となりました。この“復活した裸婦像”のお披露目をメインに、菱田春草「秋野」、速水御舟「牡丹」、安田靫彦「風神雷神」、横山大観「耀八紘（はっこうにかがやく）」など、当館が所蔵する日本の近代絵画から優品を選りすぐって展観いたします。

黒田清輝「裸婦習作」ｃa.1888－1889
カンヴァス、油彩 79.1×61.2㎝

コレクション名品選２
# きらめくガラスと陶磁の美
7月14日(土)～10月8日(月･祝)

美術館リニューアルにあわせて遠山記念館の名品を紹介する展覧会の第2弾。様々な時代や地域の所蔵品の中からエジプトやイラン、シリアなどのガラスと、日本・中国・中近東・中南米の陶磁器および土器、土偶が一堂に会します。ポップで涼しげな古代ガラスの香油瓶や、吉祥や四季の風情を盛り込んだ陶磁器の鉢、日本独自の発展を遂げた茶の湯の器、そして来世へ旅立つ人へ奉げたユニークな土器など、その装飾や文様などからそれらを生み出した文化的背景や人々の思いを辿っていきます。

[主な出品作品]

＜ガ　ラ　ス＞　コアガラス香油瓶　エジプトまたは東地中海域　前6－前4世紀
円文様カットガラス碗　イラン・ササン朝 6－7世紀(写真上)、モスク・ランプ　シリア 18世紀

＜土器・土偶＞　渦巻文様双耳壺　エジプト　先王朝時代　前第4千年記　ゲルゼー期
加彩母子人形双把手付壺　ペルー・チャンカイ文化(1100－1470頃)、女性像　シリア北部　前2千年紀

＜陶　磁　器＞　青釉壺　イラン　8世紀、青白磁唐子唐草文鉢　中国　北宋時代 12世紀
青磁犬鷹香合　中国　明時代末期 17世紀
黒楽茶碗　銘 大威徳　長次郎　桃山時代 16世紀(写真下)
色絵蝶牡丹に鳥文鉢　古九谷　江戸時代前期 17世紀

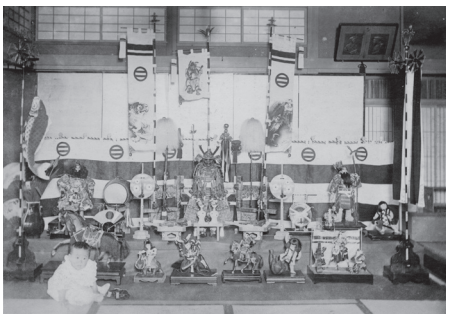
2018年 前期 催しもの

遠山家端午の節句飾り

4月11日(水)～5月6日(日)

遠山元一が長男一行（大正11年生まれ）の初節句の祝いとして揃えた、端午の節句飾りです。毎年、雛壇飾りと同様、遠山邸の中棟大広間に飾られます。

その中には、人間国宝の二代目平田郷陽や京都の大木平蔵など名工の作品も含まれ、鎧兜を中心に、鍾馗、神武天皇、日本武尊、応神天皇、源為朝、加藤清正、本多忠勝など勇猛な姿の人形や飾り馬、また金太郎をはじめ、子どもの姿を表した愛らしい人形などが並んでいます。



端午の節句茶会

遠山邸の端午の節句飾りに合わせ「遠山記念館　端午の節句茶会」を開催致します。普段は公開していない遠山邸の2階、数寄屋座敷で行います。2階は本座敷の他、洋間の応接室や寝室が設けられており、呈茶の後、こちらのお部屋もご見学いただけます。

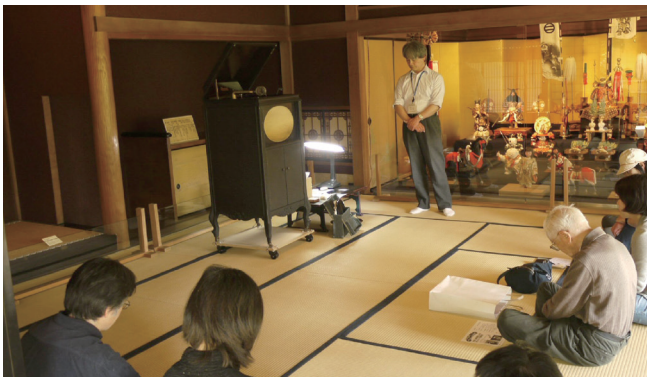
お申込み

電話もしくはメールで3月1日（木）より予約を受付けます（TEL 049-297-0007、メール tkkk@e-kinenkan.com）。定員に満たなかった場合は、当日のご参加も受付けます。

日時：5月6日(日)
午前11：00～（第1席）／午前11：40～（第2席）
午後 1：00～（第3席）／午後 1：40～（第4席）
午後 2：20～（第5席）／午後 3：00～（第6席）
各回とも25名様

会場：遠山邸 中棟 2階座敷
席料：1,000円（別途入館料）
呈茶：埼玉県表千家青年部
担当：依田 徹（当館学芸課長）

●レトロな空間で、ノスタルジックな音楽を 手回し蓄音機による SPレコード鑑賞会 Part 22



日時：5月4日(金・祝)　午後1：30～2：30
会場：本館大広間　**定員：**50名(先着順)
参加費：入館料のみ

和風建築の技術の粋を集めて昭和初期に建てられた、遠山邸の大広間で、今ではほとんど忘れ去られてしまったSPレコードの鑑賞会パート22を行います。SPレコードは、エジソンが蝋管式のレコードを発明してから、大量生産に向く円盤型になって、音楽を記録する唯一のメディアとして一世を風靡しましたが、割れやすく、記録できる音域も時間も限られ、やがてLPレコードの出現によって姿を消しました。しかしながら、当時の名演奏家・名指揮者の演奏は、SPレコードでしか聴くことはできません。貴重な記録の中から、クラシック曲からはテノールのエンリコ・カルーソーなど伝説的な歌手の歌声や童謡・唱歌などを聴く予定です。電気を一切使わず再生されるノスタルジックな音をお楽しみください。

なお、ご自宅にSPレコードをお持ちの方は、当日お持ち頂ければ飛び入り再生も受け付けます。

登録文化財のお座敷で一服いかがですか？

桜花から若葉萌え出る季節へ、いよいよ春たけなわを迎える遠山邸にて、お抹茶（薄茶）をお召し上がりいただけます。今回は2日間にわたり、普段非公開の2階座敷と離れの小間に釜がかかります。堅苦しいお作法は一切いりません。それぞれの趣向をお楽しみください。参加御希望の方は、各々の呈茶席受付でお申込み下さい。いずれも席料は500円（別途入館料）です。お菓子がなくなり次第終了する場合がございます。

2階座敷からの庭の眺め

第1回　日時：4月7日(土)
午前10：00～午後3：00
会場：遠山邸中棟2階座敷
主催：川越茶友会

第2回　日時：4月8日(日)
午前11：00～午後3：00
会場：離れ茶室
主催：縁喜庵佐藤宗雲・佐藤宗紅 両氏

離れ茶室

4月8日には「投扇興を楽しむ会」も開催します。
午前11：00～12：00・午後2：00～3：00　どなたでも参加可能です。

「遠山記念館 友の会」発足のご案内

「遠山記念館 友の会」は、遠山記念館を何度も訪れたいという方や、邸宅・庭園および美術館の活動やイベントに積極的に参加したいという方のための集まりです。

入館料をはじめ、講演会など各種イベントへの無料ご招待、図録やミュージアムグッズの割引など、様々な会員特典をご用意して皆様のご入会を心よりお待ちしております。

※年会費は3,000円（毎月入会月から1年間有効）で入会金はありません。
※2018年4月1日より募集を開始いたします。詳しくは別途案内チラシをご参照下さい。

2018年 前期　遠山邸2階　特別公開日

4月22日（日）・5月26日（土）・6月9日（土）
午前11：00～午後3：00

昭和初期の雰囲気が色濃く漂う和洋折衷の応接室を中心に、庭園を一望できる14畳の座敷、和風サンルームのような畳廊下など見どころがいっぱいです。

利　用　案　内

◇入　館　料

期　間		一　般	学　生
美術館 休館中	～3/31	500円	300円
特別展「遠山元一と美術」	4/1～5/13	1,000円	700円
コレクション名品選	5/19～	700円	500円

中学生以下は無料（団体20名以上は2割引となります）

◇開　　館　午前10:00～午後4:30
（入館は午後4：00まで）

◇全 館 休 館　3月13日（火）
4月10日（火）・5月8日（火）

◇邸宅・庭園のみ公開
3月31日（土）
5月15日（火）～18日（金）
7月 3日（火）～13日（金）

◇詳しい展覧会情報は下記でご覧いただけます。
URL http://www.e-kinenkan.com

電車・バスでのご来館の場合
- 東武東上線・JR埼京線　川越駅
- 西武新宿線　本川越駅　●JR高崎線　桶川駅
いずれも「川越駅－桶川駅」間の東武バスで
牛ヶ谷戸（うしがやど）下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合
- 圏央道川島ICより7分
- 川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより　第54号
2018年２月 発行
編集発行　公益財団法人遠山記念館
編集担当　小野　恵

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675
TEL 049-297-0007
FAX 049-297-6951